

研究ノート

ドイツ語教育における宗教的な要素の取り扱い

曾 田 長 人

序

ドイツ語には他の諸言語と同様、宗教にまつわる表現が多く存在し、ドイツ語圏の社会、生活、文化の中にも宗教の影響が数多く見て取れる。こうした宗教的な表現や宗教的な影響は、ドイツ語圏とは異なる文化・宗教圏に属し、海外の滞在経験も少ない一般の日本人大学生にとって、必ずしも理解が容易ではない。したがってドイツ語教育において宗教的な要素をどう取り扱うかという問題について、一考の価値があると思われる。

本論は、こうしたドイツ語教育における宗教的な要素の取り扱いについて検討を行う。論述の構成は以下のとおりである。まず異文化理解の理論の枠組みの一類型である「信号、記号、象徴」という3つのレベルでのコミュニケーションの捉え方について整理する（Ⅰ）。引き続き本論の中心的なテーマである、ドイツ語の授業における宗教的な要素の取扱いについて具体的に考察し（Ⅱ）、宗教的なもの、象徴的なものと出会う場としてのドイツ語圏の滞在について触れる（Ⅲ）。最後にⅠ～Ⅲを総括し、今後の課題に言及する（結語）。

なお本論においてドイツ語圏との関連で宗教が問題となる場合、ドイツ語圏で最も影響が強い宗教であるキリスト教を主に指すことを予め断っておく。

Ⅰ. 異文化理解の理論の枠組みの一類型：信号、記号、象徴

近年、航空運賃の低下、インターネットの普及等により、ドイツ語圏の社会、生活、文化に直接、間接に触れることは、かつてと比べてはるかに容易になった。ドイツ語教育もこうした変化の影響を蒙り、ドイツ語という言語の習得に留まらず、ドイツの社会、生活、文化といった異文化理解を目的とするものへと自己理解が変化しつつある。本論もドイツ語教育といった場合、それをドイツ語のみならずドイツ語圏の社会、生活、文化を知ることが目的とするものとして理解する。それゆえ人間によるコミュニケーションを言語、非言語の両面を含めて捉える異文化理解の見方に沿って考察を行う。そしてこの枠組みに依拠して、宗教的な要素の理解とドイツ語教育との関連を考察す

る。

イギリスの社会人類学者エドモンド・リーチ(Edmund Reach)は『文化とコミュニケーション 構造人類学入門』において、人間のコミュニケーションを以下の3つの表現的行為に分けて考察している¹。

第一は「自然的・信号的なレベルsignal」(以下「信号的なレベル」)である。これは自動的な条件反応のメカニズムで、Aが引き金となってBを喚起する反応である²。「人間を含むあらゆる動物は四六時中、実に多種多様な信号に絶えず反応して生きている」³。例えば、喉が乾けば飲むものを探すといった反応が、この信号的なレベルのコミュニケーションに当たる⁴。

第二の「社会的・記号的なレベルsign」(以下「記号的なレベル」)と第三の「象徴的なレベルsymbol」は、共に「標号signum」として「その意味内容との連合が文化的な約束事にもとづく」⁵。しかし両者の相違は以下の点にある。つまり「一つの標号は、AとBが同じ文化的脈絡に所属するため両者間に本質的で優先的な関係が存在する場合に、一つの記号となる。(中略)支配君主の王位記章の一番大切な項目は王冠であったというヨーロッパの政治的伝統の脈絡では、王冠は君主権を表す記号である」⁶。これに対して「標号が象徴であるのは、AがBを表わし、かつAとBの間に本質的で優先的な関係性が存在しない場合、つまり異なる文化的脈絡にAとBが属する場合のことである。(中略)聖書の物語では、エデンの園の蛇は悪を表す象徴である。蛇の動物学的脈絡は、悪という概念のもつ道徳的脈絡と本質的な関係性を持たない」⁷。リーチによれば記号と象徴の相違は、換喩と隠喩の相違に照応している⁸。青木保は第二の記号的なレベルでの理解の例として「アメリカやヨーロッパ大陸は左ハンドル、日本やイギリスなどは右ハンドル」⁹、第三の象徴的なレベルでの理解の例として、「外部の者にとってはきわめて理解するのが困難な」¹⁰信仰や宗教の世界の理解を挙げている。

次にこの「信号、記号、象徴」という3つのレベルでのコミュニケーションが、ドイツ語教育に

1 エドモンド・リーチ『文化とコミュニケーション 構造人類学入門』(青木保・宮坂敬造訳、紀伊國屋書店、1981年) p.25. 青木保『異文化理解』(岩波新書、2001年) pp.142-151も参照。

2 同上、p.51, 30.

3 同上、p.31.

4 同上.

5 同上、p.30.

6 同上、pp.32-33.

7 同上、p.34.

8 同上.

9 青木、前掲、p.144.

10 同上、p.145.

においてどのように位置づけられるのか、考えてみたい。なお日本語を母語とする者がドイツ語を学ぶ場合、日本語とドイツ語はそれぞれ異なる文化的脈絡に属するので、その理解は厳密に考えれば全て象徴的なレベルでの理解たらざるを得ない。しかし本論においては、日本とドイツ語圏諸国はヨーロッパに端を発した近代文明という文化的脈絡を共有し、こうした前提の下で記号的なレベルと象徴的なレベルでの理解の相違が生じると考えることにする。

第一の信号的なレベルでのコミュニケーションは、文化の違いを超えた人間の基本的な属性、特に非言語の面に多く関わる。それゆえドイツ語教育の現場では、いわば自明の前提として、問題になることは少ないと思われる。

第二の記号的なレベルでのコミュニケーションは、ドイツ語の授業における習得の中心目標となっている。つまりリーチによれば、「記号とは、たとえば代数式の＋、－、＝のように、全く固定されていていつも同じ意味で用いられる慣習的表記である」¹¹。この説明に倣えば、ドイツ語の授業においても初級の段階にあっては、ドイツ語の基本単語の代表的な意味や基本的な文法、代表的な会話表現等を会得し、ドイツ語圏の社会、文化、生活における独自の取り決めに習熟すること、言い換えればドイツ語やドイツ語圏の社会、文化、生活を記号として理解することが目指されている。

第三の象徴的なレベルでのコミュニケーションも、記号的なレベルの場合と同様、ドイツ語の授業において本来、習得の重要な目標たるべきである。なぜなら、ドイツと日本の宗教的な伝統は大きく異なり、ドイツ語の中には宗教的な象徴と関連した言語表現が、特に文学作品において多く存在するからである。例えばドイツ語でパンのことをBrot、葡萄酒のことをWeinというが、このBrotとWeinは最後の晩餐、それを想起するキリスト教会の聖餐式における、キリストの肉と血をそれぞれ象徴する¹²。このBrotとWeinを用いた暗示が、ドイツ語で書かれた詩や小説の中には数多く出てくる¹³。その際、BrotとWeinをめぐるキリスト教的な背景を知らないと、作品の含蓄が十分に理解できない。ところで日本のキリスト教人口は約3%以下(2009年)と少なく¹⁴、一般に日本人、日本の社会の中にキリスト教の知識、キリスト教的な物の見方が浸透しているとはいえない。こうした背景から、ドイツ語の授業の中でドイツ語、ドイツ文化を象徴的なレベルにおいて「自覚的に」理解する必要が出てくる。

このパンと葡萄酒の例に留まらず、ドイツ語は元来、宗教的な表現が豊かな言語である¹⁵。それ

11 リーチ、前掲、p.31.

12 「マタイによる福音書」26-26~29.

13 s. Hörisch, Jochen: Brot und Wein. Die Poesie des Abendmahls, Frankfurt am Main 1992.

14 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2009/07/10/1245820_005.pdf

15 現代の標準ドイツ語の母体は、16世紀の宗教改革者マルティン・ルター(Martin Luther)がヘブライ語、ギリ

ゆえ本来ドイツ語の授業においては記号的なレベルでドイツ語、ドイツ文化を教授するのみならず、象徴的なレベルまで踏み込み、社会・文化の舞台背景について啓蒙すべきだといえるだろう。リーチによれば、そうでないとある社会・文化を深く理解できないということになる¹⁶。しかし実際のドイツ語の授業においては、記号的なレベルでドイツ語を説明し、コミュニケーションの練習を行うことに留まる場合が多いと思われる。そうあらざるを得ない理由として、主に以下の2つの点が考えられる。

第一に一般化していうと、文学部以外の学部の学生は象徴的、宗教的な表現が多く含まれた文学作品に関心を持つことが多いとはいえず、こうした学生のニーズにある程度、合わせて授業を行わなければならないからである（例えば、講読よりも会話重視の授業を行う等）。第二に、現在の日本の大学のドイツ語教育のカリキュラムでは、一般的に授業時間数が少ないという制約がある。つまり週2コマ1年間か2年間ドイツ語を学んだ程度では、象徴的なレベルでの理解が必要かつ重要な語学力の段階に達することが少ない。ドイツ語の教科書などの教材も、IIにおいて触れるが、初級の段階では、象徴的なレベルでの解釈をめぐる問題が起きることを避け、意図的にわかりやすく作られている場合が多いように思われる。これは、まず学生がドイツ語に親しむことを配慮するためであろう。

次に、こうした制約を踏まえた上で、ドイツ語の授業における宗教的な要素の取扱いの実例について検討を行う。

II. ドイツ語の授業における宗教的な要素の取り扱い

筆者は、主に教科書を中心として授業を進めている。しかし補足としてほぼ毎回プリントを作成・配布し、プリントだけで授業を進めているクラスもある。教材の補足としてはプリントの配布・説明に留まらず、ほぼ毎回、ドイツ語圏の生活、社会、文化等と関連したDVD、ビデオ等を短時間（数分以下）、視聴している。それゆえ以下、1. 宗教的な要素が「書かれた内容」としてドイ

シャ語の原典から行った、ドイツ語訳の聖書に遡る。当時ドイツには様々な方言が存在したが、東部ドイツのザクセン地方のドイツ語を中心としたこのルターのドイツ語訳聖書が、活版印刷の普及も与り多くのドイツ人に読まれたことにより、共通のドイツ語であるという認識が、宗派の違いを超えて次第に定着した。この1534年に初版が出たドイツ語の聖書は、単語の表記が現在の単語の表記と異なっている点が多くあるが、その後、現代語向けに改訂され、1912年に改版した本を底本としたルター訳の聖書は、今日なおドイツ語圏で読まれている。こうしてドイツ語の隅々に至るまで聖書的、キリスト教的な表現が浸透しているということが一般論としていえる。もちろん聖書は約2000年前に書かれた書物であり、その後、新たに作り出された事物、観念を表現する語彙は聖書の中に存在しない。したがってルター訳のドイツ語聖書の中に現在のドイツ語の全ての語彙が含まれているというわけではない。

16 リーチ、前掲、p.189.

ツ語の教材の中でどのように取り扱われているか、2. 宗教的な要素をドイツ語の授業の中での「口頭による補足説明」としていかに取り扱うことができるか、という2つに分けて整理する。

1. ドイツ語の教材の中の宗教的、キリスト教的な要素

現在ドイツ語を初めて学ぶ大学1年生を対象とした初級の教科書、1年以上ドイツ語を学んだ、主に大学2年生以上を対象とした中級・上級の教科書が、各種、出版されている。筆者は本論のテーマを考察するに当たって、特に自分が今まで授業で用いたドイツ語の教科書を中心に、宗教やキリスト教と関連する要素がドイツ語の教材の中にどのように現れているか、調査を行った。その際、教科書会社¹⁷のカタログも参考にした。全てのドイツ語の教科書に直接、目を通したわけではないので遺漏はあるかと思うが、以下1年生向けの初級教科書と2年生以上向けの中級・上級の教科書という2つに分けて整理を行う。

1) 1年生向けの初級教科書

1年生向けの初級教科書は、初等文法を学びつつ会話や講読の練習を行うものが大部分である。この種の教科書は記号的なレベルでのドイツ語、ドイツ文化の理解、コミュニケーションに関わる内容が多く、象徴的なレベルの宗教に踏み込んだ記述は、クリスマスに関する記述を除けば、それほど多くはない。以下、例外ともいえる宗教的、キリスト教的な要素の記述に踏み込んだ例を3つ紹介する。

第一に、ドイツ語の読み物の中にキリスト教と関連する話題が取り上げられている例として、渡辺学/Rita Briel『アルタークスレーベン（日常生活）』という教科書が挙げられる。この教科書の序文には「ドイツ語圏（とくにドイツ連邦共和国）の日常生活・生活文化に焦点を当て、遠くアジアに暮らしているわたしたちの目からみて異質な、興味深い事柄を取りだしてみました」¹⁸とある。文法事項の説明と一体になった全12章の中には「ローマン家と洗礼」「教会と式典」「結婚式」といった、キリスト教と関わる話題の読み物が3章、含まれている¹⁹。

第二に、キリスト教の儀式に関する解説が入ったものとして、立教大学ドイツ語教育研究室監修『シュトラッセ・ノイ Ver.2.0』という教科書がある。この教科書は、立教大学がミッション系の大学であるためか、コラムで「キリスト教の習慣」を「洗礼、堅信礼、結婚式、葬式」と「謝肉祭、復活祭、聖霊降臨祭」という2回に分け、計3ページにわたって簡潔に紹介している²⁰。

17 朝日出版社、三修社、郁文堂、同学社、白水社、第三書房。

18 渡辺学/Rita Briel「はじめに」(『アルタークスレーベン Wir leben in Deutschland』[郁文堂、2003年] 所収)。

19 同様の構成を持つ教科書としては、中級レベルであるが、石井寿子/Andreas Raab『ドイツ人の一生(改訂版)』(朝日出版社、2008年)が挙げられる。

20 立教大学ドイツ語教育研究室監修『シュトラッセ・ノイ Ver.2.0』(朝日出版社、2011年) pp.83-84, 98.

第三に、第二の『シュトラッセ・ノイ Ver.2.0』と同様、コラムでキリスト教と関わるトピックを扱ったものとして、根本道也『ドイツってどんな国?』という教科書が挙げられる。この教科書には、「キリスト教と教会建築」と題するコラムが収録されている²¹。

2) 2年生以上向けの中級・上級教科書

このタイプは、二つに分かれる。

第一のタイプは、キリスト教と関わるドイツ語の作品を、ドイツ語をすでに1年以上、習った大学2年生以上にも理解できるよう、やさしく書き直した読本である。教科書会社のカタログには、小塩節『聖書物語Ⅰ、Ⅱ』（朝日出版社、1985年）、フリードリヒ・ユストゥス・クネヒト『旧約物語』（三修社、江沢建之助編注、1958年）など旧約聖書の物語のダイジェスト、鹿子木コルネリア『パルツィファル伝説』（郁文堂、1970年）などキリスト教色の濃い説話、アルベルト・シュヴァイツァー『生への畏敬』（郁文堂、酒井滋編、1965年）、ゲルトルート・フォン・ル・フォール『クリスマスのかて』（三修社、大谷恒彦編注、1988年）などキリスト教の背景が濃い作家の著作が載っている。この種の読本はおよそ20年前から50年前に出版され、最近では出版されていない。その理由として、1991年の大学設置基準の大綱化以降、ドイツ語の必修の履修年限を短くする、あるいはドイツ語の履修を必修ではなく選択科目扱いにする大学が増え、中級・上級のドイツ語の科目数が日本の大学において総体として減ったことが考えられる。

第二のタイプは、日本とドイツとの宗教の違いに関わるトピックを扱うものである。その例として、大谷弘道『ドイツ人に答えてみよう』という教科書が挙げられる。この教科書は、来日したドイツ人が不思議に思う日本の社会・文化の姿を、ドイツ語の短い読み物として収録している。注目に値するのは、「日本人は死者と話すことができるの?」という見出しがつけられた、この教科書の第5課である²²。この第5課においては、ドイツ人が日本の告別式に出席し、故人の親類縁者が故人の遺影を前に弔辞を読むのを見て、驚く。なぜならドイツにおいては故人の親類縁者が弔問客に対して弔辞を読むことはあっても、故人の遺影に話しかけることはないからである。このような相違が存在する背景として、以下のような日本とドイツとの宗教的な伝統の相違があると考えられる。

ドイツにおいてはキリスト教の影響下、霊魂と肉体（>故人の遺影）は別であり、人が亡くなるとその霊魂は神の手に帰し、故人の親類縁者の前にはないと考える。したがって故人の肉体（>故人の遺影）は重要ではなく²³、故人の親類縁者が呼びかけるとすれば、故人の魂が天国の神に受け

21 根本道也『ドイツってどんな国?』（同学社、2011年）p.60。

22 大谷弘道『ドイツ人に答えてみよう』（三修社、2008年）p.38。

23 ただしカトリック教会の影響が強かった中世においては、復活の際に体の蘇りが信じられたことから故人の肉体が重視され、死者の肉体を火葬ではなく土葬に付すことが多かった。しかし復活が起きる最後の審

入れられるよう個人的に神に対して呼びかけるか、公けの告別式で弔問客に対して呼びかける。これに対して日本においては靈魂と肉体を峻別する宗教的な伝統が存在しないので、遺影を含めた個人の様々な形見を重視する。そして告別式においては、故人の親類縁者が弔問客を代表し、故人の靈魂を含めた肉体からの別れを、故人の遺影に語りかけることによって惜しむのであろう。

2. ドイツ語の授業の中での、宗教的、キリスト教的な要素の説明

次にドイツ語の授業において口頭で補足として行う、宗教的、キリスト教的な要素の説明へと移る。

筆者は今までの授業において、現代のドイツ語圏の社会、文化や生活に宗教的、キリスト教的な背景があるということを、折に触れて説明してきた。以下その例を5点、挙げる。

① ドイツ語圏の国々には閉店法という法律がある。この法律によって店は原則として日曜日は閉店、平日の営業時間も一定の時刻内に定められている。この法律が制定された背後には、聖書における「安息日を守ってこれを聖別せよ」²⁴という十戒の掟の一つがある。これと関連して、ドイツ語圏諸国には日本とは対照的にコンビニが存在せず、自動販売機も数が少ないことに触れることもある。

② ドイツと日本の祝日を比較すると、ドイツではイースター、クリスマスなどキリスト教と関係した祝日が多いのに対して、日本では春分の日、秋分の日、海の日など、自然と関係した祝日が目立つ（ちなみにこの両者の詳しい列举、比較は、佐藤修子ほか『スツェーネン2 場面で学ぶドイツ語 integriert』という教科書が行っている。この教科書は「身近な事柄についてドイツ語圏の事情を学び、それに対応する日本事情をドイツ語で表現することを目指し」²⁵、「レストランで、ホテルで、街で…」などテーマ別の章の中に「祝祭と祝日」という章²⁶が含まれている）。その際、日本の祝日の特徴は、自然を神として崇める神道の影響と関係があるだろう、という補足を行うこともある。自国の日本における宗教的な要素を意識化できると、ドイツ語圏における宗教的、キリスト教的な要素の役割も理解できる場合が多いからである。

同様の理解の例を挙げておきたい。ドイツ語圏においてはクリスマスの時期12月24日の夕方から26日までが祝日で、24日の夜には盛大に教会の鐘が鳴らされ、町中に神聖な雰囲気が漂う。その様子は、ドイツ語圏に滞在したことのない日本の学生にとって必ずしも理解しやすい

判まで、肉体に靈魂は宿らないと考えられた。

24 「申命記」5-12（以下、聖書からの引用は新共同訳〔日本聖書協会、2002年〕による）。

25 佐藤修子／伊藤祐紀子／Heike Papenthin／Ute Perz 「はじめに」（『スツェーネン2 場面で学ぶドイツ語 integriert』〔三修社、2007年〕所収）。

26 同上、p.70.

ものではない。しかしこのドイツ語圏のクリスマスは、日本においては除夜の鐘が鳴らされる大晦日から三賀日にかけてと雰囲気が似ているという、学生は腑に落ちることが多いようである。

- ③ ドイツにおける徴兵義務について触れた教科書²⁷がある。この徴兵義務はドイツにおいて2011年7月に廃止されたが、それまではいわゆる良心的兵役拒否が認められていた。すなわち「殺してはいけない」といった自らの依拠する宗教的、キリスト教的な信条²⁸に基づいて、審査を経た上で兵役を拒否でき、代わりに福祉施設、教会関係機関その他で奉仕（ボランティア）を行うことが義務付けられていた。これに授業で触れたことがある。

授業中に視聴したDVD、ビデオの中では、

- ④ ドイツで最も高い山であるツークシュピッツェ（Zugspitze, 2962m）のDVDを見た時、山の頂上や峰の先端に、十字架が立てられている光景が映し出された。日本で山の頂上や峰の先端に十字架が立てられていることはまずない。それゆえこの時は、日本の山の頂上や峰の先端に仏像や祠が立てられている場合があることとの類比で説明を行った。つまりドイツ、日本を問わず高い山へ登ることは、下界から遠ざかり神あるいは仏のまします神聖な天に近づくことであり、神あるいは仏を讃えるしるしとして十字架や仏像、祠が立てられたのではないかと、いうことを述べた。
- ⑤ ケルンの大聖堂などドイツ語圏の教会がDVDやビデオの中に出てきた場合、中のステンドグラスが聖書の物語をテーマとしていること、文盲の人が多かった中世、聖書を読めなくともステンドグラスの絵を見ればキリスト教のエッセンスを理解できたこと、一般にステンドグラスが立派なのはカトリックの教会であることなどを話すように心がけている。さらに教会におけるパイプオルガンの演奏は印象的なので、ドイツ語圏へ行く機会があれば演奏を聞くよう勧めることにしている。

以上、閉店法、祝日・祭日、徴兵義務、山の頂上の十字架、教会を例に、ドイツ語の授業において宗教的な要素について触れる事例を紹介してきた。ところでリーチは、「記号や象徴が意味を獲得するのは、他の対立する記号や象徴から区別される対照されるときだけである」と述べている²⁹。それゆえドイツ語圏における象徴的なレベルの宗教的、キリスト教的な要素を理解する場合、先ほどの祝日・祭日の例に表れたように、日本文化あるいは学習者本人の宗教との関わりを問い直すことが重要ではないかと思われる。

27 小野寿美子／中川明博／西巻文児『ドイツ☆スーパー！』（朝日出版社、2005年） p.37.

28 「申命記」5-17.

29 リーチ、前掲、p.103.

次に、こうした宗教的、キリスト教的な要素をドイツ語の授業において紹介する際、筆者が注意すべきと考えている点に触れたい。外国の他宗教などの馴染んでいない象徴に触れると、以下の2つの対極的な反応があり得る。

一方は、こうした象徴を拒否する反応である。日本においてキリスト教があまり広まっていないことを先ほど述べた。したがって宗教的、キリスト教的な要素も含んだ象徴的なレベルの理解を学生に要求し、学生の学力・関心とテキストの内容、授業の方法との間にミスマッチが生じると、ドイツ語の学習を阻害する要因になる危険がある。「象徴とはその正しい解釈のために、ある別の（その都度の）定義に依る必要のある標号」³⁰というわけであるから、宗教的、キリスト教的な象徴を多く含む教材を扱う場合、それに関して適切な解釈が施されないと、学生は途方に暮れ、ドイツ語の学習に関してマイナス面に働きかねない。

しかし他方で難解さということが、逆に魅力や憧れに繋がることもあるのではないか。意味はよくわからないけれども、言葉や像、音などからなる象徴の背後に何かありそうだと、それを詳しく知ってみたい、という気持ちを抱くことはないだろうか。続くⅢにおいては学生がドイツ語圏へ行った時の経験に触れるが、何人かの学生はドイツ語圏の滞在中、教会を見学し、その象徴の全てを理解できたわけではなかったと思われるのに、そこに何か惹きつけられるものを感じたと述べている。こうした場合、象徴の難解さは、第一の場合とは対照的に、学習を促進する要因になると考えられる。

こうしてドイツ語の授業で宗教的な要素を取り扱う場合、どうすれば学生のドイツ語学習意欲を阻害することなく、むしろ促進する刺激を与えられるか、ということが大きな課題になるとと思われる。

以上Ⅱで述べたように授業での試みを通して、ドイツの社会、文化における宗教的な要素の啓蒙に努めても、ドイツ語やドイツの文化、社会における象徴の重要性に、学生に気付いてもらうのは難しい、というのが現状である、しかしこうした宗教的なもの、象徴的なものと出会い、その重要性に開眼する機会となるのが、ドイツ語圏への滞在である。

Ⅲ. 象徴的なもの、宗教的なものと出会う場としての、ドイツ語圏への滞在

2012年3月、筆者は経済学部で欧州海外研修に引率教員として参加した。研修の終了後、学生が提出したレポートを読み、興味深く思うことがあった。この欧州海外研修においてはドイツとフランスとを12日間をかけて回り、研修中ドイツではマールブルクのエリーザベト教会、フランスではストラスブールの大聖堂を全員で見学した（エリーザベト教会では現地の日本人による解説がつい

30 同上、p.31.

た。後者はストラスブールがドイツ語圏に属した時代に完成し、ゴシック様式によるドイツ建築の代表と見なされることもある³¹ので、本論においてもドイツの教会と見なすことにする)。研修の報告レポートを読むと、レポートを提出した全22名の学生中4名の学生が、ドイツ・ヨーロッパの社会や生活を理解する上で、キリスト教や宗教の存在が重要であることに言及していた。以下、学生が提出したレポートから、こうした言及箇所を紹介する。

ヨーロッパに行くと、宗教について考える機会がいやでも増えてきます。それは、日本ではすでに失われた考え方や思想の中心に今も根強く宗教としてのキリスト教が染み付いているからでしょう。

地図を見れば、いくつもの教会が目につきますし、日曜日に集まってのミサ、祈りの時間は今も多くの人が習慣としていました。

宗教と経済をつなげて考えるような機会が今まで無かったのですが、今回の研修を通して、経済の手段のひとつに宗教というものが大きな役割を果たしていることに気がつきました(中略)。私にとってそれ(宗教—引用者注)は遠い過去のものであり、現実味のない物語の中のようなものでした。遠いものであった宗教、ひいてはキリスト教について、今回の研修旅行を通して初めて身近に感じる事ができたので、改めて考えることにしました。³²

この学生はホルスト・ツィンマーマン(Horst Zimmermann)教授の特別講義「経済学者の目から見たマールブルクと聖エリーザベト」に触発され、マールブルクを例に「経済に影響を与える宗教」というテーマで報告レポートを書いている。「日曜日に集まってのミサ」というのは、ストラスブールの大聖堂を訪れた時、夕方の礼拝を見学した時のことをおそらく指している(ちょうど3月11日で、1年前の東北日本大震災での犠牲者を悼む祈りも捧げられていた)。引用文の中には、教会の礼拝への参加が今の多くのヨーロッパ人の習慣となっているとあり、これには疑問の余地がある(結語を参照)ものの、ドイツを含めたヨーロッパにおいて宗教、キリスト教の重要性に接した驚きが綴られている。

別の学生は、次のように書いている。

ドイツ・マールブルクの聖エリーザベト(ママ)教会はとても感動した。初めて間近で見た教

31 ゲーテ「ドイツの建築」(登張正實編『ヘルダー ゲーテ』[中央公論社、1979年] pp.303-311)。

32 「経済に影響を与える宗教」(『2012年3月 第6回欧州海外研修～報告と記念文集～』東洋大学経済学部、2012年)p.25。本報告書は公開を目的としたものではないので、出典についてはページ数のみを記し、レポートの筆署名は伏す。以下同様。

会だったので、外観の繊細な彫刻や中の雰囲気まで見るもの全て感動した。

また宗教画にふれたのも初めてだったが、案外面白く今まで全く興味がなかったのはもったいなかったと思った。³³

この学生も、初めてキリスト教会の彫刻や建築に触れた感動を率直に報告している。さらに別の学生は、ストラスプールの大聖堂を訪れた感想を次のように記している。

日曜のミサには多くの人が集まり、人々は思い思いに祈りを捧げていた。また、その中には様々な人種の人々が多くいると感じ、ヨーロッパに住む人々の信仰の深さが伺えた。^(ママ)個人的に、日本よりもヨーロッパは宗教が身近であると感じた。また、装飾の美しさは宗教の信仰関係なく、見る人々全てを惹きつける。芸術的な面でも、教会の存在は大きいと感じた。³⁴

この学生はストラスプールの大聖堂に入り、おそらく日本人の寺社仏閣との関わりを意識した上で、ヨーロッパにおける宗教（キリスト教）、教会の重要性、宗教を超えた教会の装飾の美しさについて述べている。

以上で紹介した3つの例から、ドイツ語圏への滞在が、経済学部という文学部以外の学生にとっても、宗教的、キリスト教的な要素と出会い、そのドイツ語圏やヨーロッパにおける重要性を知る切っ掛けとなったことが伺われる。

ところでリーチは、記号と象徴は不可分一体であると説き、文化の意味を楽譜に譬え、旋律が記号的なレベル、和音が象徴的なレベルを表すと指摘している³⁵。この譬えに依拠すれば、ドイツ語圏へ滞在すると、記号的なレベルと象徴的なレベルでのドイツ文化を一体として経験できる。他方、日本にいる限り、和音だけ取り出して象徴的なレベルつまり宗教やキリスト教について理解できても、それがドイツの文化・社会の中で持つ意味や重要性までは実感することが難しい、ということになる。上で触れた欧州海外研修の参加者には、ドイツ語あるいはフランス語を初習外国語として修得中の1年生、2年生も毎年、参加者の一定数、含まれ、研修の参加は、彼らにとって初習外国語を続けて学習する動機付けになる場合もあるようである。

33 「経済学部欧州研修レポート 2012年3月8日～3月19日」同上、p.54.

34 「欧州研修レポート」同上、pp.102-103.

35 リーチ、前掲、pp.35-36.

結語

以下、Ⅰ～Ⅲにおいて述べた内容を6点にまとめる。

1. 異文化としてドイツの文化、社会を理解し、ドイツ語を使いこなせるようになるためには、記号的なレベルのみならず、宗教的な要素を取り扱う象徴的なレベルにおいてもドイツ語、ドイツの文化、社会を理解することが理想である。しかし、
2. ドイツ語の授業の実際において、学生が象徴的なレベルでドイツの文化、社会へ関心を持つとは限らず、ドイツ語の授業時間数が少ないため、象徴的なレベルでの理解が必要かつ重要なドイツ語力の段階まで達することが少ない等の制約が存在する。こうした制約の中で、
3. 宗教的な要素に触れた教材（教科書）は、数は多くないものの存在し、こうした教材を用いて、あるいは授業中の口頭説明などを通して、宗教的、キリスト教的な要素（の重要性）について説明することができる。
4. その際、日本文化あるいは学習者本人と宗教との関わりを意識化できると、ドイツ語圏における宗教的な要素を理解しやすくなる。
5. ドイツ語の授業において宗教的な要素を取り扱う場合、どうすれば学生のドイツ語学習意欲を殺ぐことなく、むしろ促進する刺激を与えられるか、という点が重要である。
6. ドイツ語圏へ滞在すると、宗教的なもの、象徴的なものと出会い、ドイツ語圏の文化・社会におけるその重要性に気付きやすくなる。

最後に今後の課題として2点、述べておきたい。

1. ドイツ語圏における宗教状況の変化

これには2つの側面が存在する。

第一の側面は、近年ドイツ語圏諸国において世俗化、非キリスト教化が進んでいることである。「ドイツ人の世界観に関する研究グループ」の調査によれば、ドイツにおいては1950年、カトリック教会に属する人が約45.8%、プロテスタント教会に属する人が約50.6%、キリスト教会に属さない人のデータはなし、その他の宗教・宗派に属する人が約3.6%であった。ところが2008年には、カトリック教会に属する人が約30.0%、プロテスタント教会に属する人が約29.9%、キリスト教会に属さない人が約34.1%、キリスト教以外の宗教（主にイスラム教）を信じる人が約6.0%となっている³⁶。つまりドイツにおいては過去60年の間に、キリスト教会の二大宗派であるカトリック、プロテスタントいずれかの教会に属する人が約35%減り、代わりにいずれの教会にも属さない人がほぼ同数、生れたことになる。こうした宗教状況の変化には政治的な背景がある。つまり旧東ドイツにおいては無神論を標榜する共産主義政権が非宗教化を推進したため、キリスト教会に所属する人

36 http://fowid.de/fileadmin/datenarchiv/Religionszugehoerigkeit_Bevoelkerung__1950-2008.pdf

は1950年の約95%から1989年の約30%へと大幅に減少している³⁷。この旧東ドイツと旧西ドイツとが統一したため、キリスト教会に属さない人の数が増えた、という要因が無視できない。しかしそれを考慮に入れるとしても、ドイツ語圏の社会全体として世俗化、非キリスト教化の進展は否めない³⁸。

第二の側面は、移民の増大に伴う宗教の多様化である。近年ドイツ語圏諸国においては東欧、中東のイスラム教圏からの移民の数が増えている。彼らの多くはイスラム教を信じ、現在のドイツ語圏諸国、特にドイツやスイスは多文化、多宗教社会になりつつある。その結果イスラム教と伝統的なキリスト教的、啓蒙主義的な価値観との衝突が生じている。ドイツ語の授業を通してこうした変化を知る機会があったので、以下、紹介したい。年末、筆者のドイツ語のクラスは、ドイツ語で書いたクリスマスカードをドイツ語圏スイスの学校の生徒へ送り、返事のドイツ語を日本語へ翻訳する訓練を行っている。一昨年、東洋大学のある学生が「あなたはクリスマスをどう祝いますか」という質問をカードに書いたところ、「私はイスラム教徒なのでクリスマスは祝いません」という返事が返ってきた。この返事を書いたスイスの学校の生徒は、親と共にトルコからスイスへ移ってきたとのことだった。この返事をもらった東洋大学の学生は驚いていたが、ドイツ語圏諸国における宗教的な要素が、キリスト教的なものからイスラム教が代表する他宗教も含めたものへと変化しつつあることを知ることができ、学生にとってはドイツ語圏社会の変化を知るいい経験ではなかったかと思う。

こうしてドイツ語圏における宗教の代表としてキリスト教を理解する必要性、重要性は、一方では世俗化の進展、他方では他宗教の影響が増えることによって減る可能性がある³⁹。

2. 日本におけるドイツ語教育の意味付け

ドイツ語は、外国人との会話やコミュニケーションのツールとしての重要性という点について、英語、中国語、スペイン語などに対して母語人口の数という点において匹敵し得ない（ドイツ語を母語として話す人は世界中で約1億500万人存在し [2005年]、これは世界で10番目に多い母語人

37 <http://de.wikipedia.org/wiki/DDR#Religion>

38 オーストリアにおいてカトリック、プロテスタントいずれかの教会に属する人の比率は1951年の約95%から2009年の約70% (<http://de.wikipedia.org/wiki/%C3%96sterreich#Religion>) へ、スイスにおいて同じ人の比率は1970年の約97%から2010年の約70% (http://de.wikipedia.org/wiki/Religionen_in_der_Schweiz) へと減っている。古典文献学者のマンフレット・フーアマン (Manfred Fuhrmann) は、聖書が同時代のドイツで読まれなくなっていることに対して警鐘を鳴らしている (Fuhrmann, Manfred: Die Bibel, ein gefährdetes Element der Kultur, in: Bildung. Europas kulturelle Identität, Stuttgart 2002, S.90-111.)。

39 ただし「世俗化＝脱宗教化、脱キリスト教化」なのか、という点、教会の成員数が減少がドイツ・ヨーロッパ社会におけるキリスト教の影響の低下をそのまま意味するか、という点については、異論の余地がある。

口である⁴⁰⁾。しかも日本は、ドイツ語圏諸国と国境を接しておらず、ドイツ語をコミュニケーションの道具として学ぶ必要性が高いわけでもない。したがって記号的なレベルにおける有用性とは異なった次元においても、外国語としてのドイツ語教育の意義を考えてゆかざるを得ないと思われる。こうした観点から、宗教的な要素を含めた象徴的なレベルでドイツ語圏の文化・社会を理解する重要性に改めて注目し、ドイツ語圏の文化や社会の中から学ぶに値すると思われる物の見方、誇張していえば価値観、世界観などを授業の中で学生へ伝えてゆく必要もあると思われる。

追記：本論は、2012年12月15日に開催された東洋大学人間科学総合研究所「大学における外国語教育の現状と未来」2012年度シンポジウム「異文化理解と外国語教育—宗教と思想の視点から—」における筆者の同名の発表原稿に、加筆訂正を施したものである。

40 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/06032707/005/001.htm